巻頭エッセイ

マジックも英語もコミュニケーション

前田知洋　Maeda Tomohiro

「何度も練習をすること。タネを明かさないこと」。書店の趣味娯楽のコーナーなどで，マジックの本を手に取ると，こんな注意が書いてあることがよくある。

けれど，マジックで大切なことは，そんなことではないと僕は思っている。もちろん，できればタネは知られないほうがいい。しかし，マジックをするときに，タネばかりに注意が行き過ぎると，一番大切なことを忘れてしまう。それは，相手と上手な関係になるということだ。

これは，英語とよく似ている。いつでも完璧に話そう，書こうとすると，つい，シャイになってしまう。そうかといって，自分の得意としているセンテンスや単語ばかりを使っていると，相手はウンザリしてしまうに違いない。

初めて外国でマジックを演じたとき，観客のほとんどは，僕の拙い英語を面白がった。外国人としての，僕の「変な英語のセリフと不可解なマジックとのコントラスト」が興味を惹いたのかもしれない。僕としては，英語学校に何年も通い，完璧に英語を話しているつもりだったけれど……。人々は，僕がわざと英語をヘタに喋っていると誤解したらしい。

アメリカやイギリス，もしくは，英語が母国語ではないドイツやスペインでさえも，それは同じだった。そんな意味では，英語圏の人々は英語を完璧に話さない人に対して，とても寛容だといえる。

このことに味を占めた僕は，わざとヘタな英語で押し通すことにした。しかし，世の中とは不思議なもので，ヘタな英語のままでいようと思っていても外国で暮らし，英語の本を読んでいれば，英語は自然に上達してしまう。やはり，マジック以外の日常生活では，英語を上手く話せたほうが，スムーズにいくことのほうが多い。

そんな「英語が上手いこと，ヘタなこと」の板挟みを経験して，僕は奇妙な幸せを感じた。他人には説明は難しいけれど，初めて大人の言葉を使った子供の感覚に似ているかもしれない。日本語と英語を選択できるだけでなく，どんな言い方かを選ぶことは楽しいことだ。近所でリンゴを買うときには，ブロークンで，カジュアルな言葉遣いのほうが店主とよりいっそう仲良くなれることもある。レストランの入り口で予約について告げるときは，フォーマルな，正確な言い回しのほうが，ほんの少しだけ良い席を用意してくれるような気がする。

相手が誰であっても自分の思いを伝えるとき，自分が知る限りの技術を使って，一生懸命に良い関係を築こうとする。そして，ときには，あえてスキを見せること，それが東洋人の美徳としての「もてなしの心」だと思っている。

何かを学んで知り，それによって選択できることが増えていく。それにより，相手を気遣い，人と人との関係が上手くいく。マジックでも語学でも，その道のりは短くはないけれど，とても楽しい道だ。

まえだ　ともひろ

1965年東京生まれ，東京電機大学情報通信工学科卒業。1988年に米国アカデミー・オブ・マジカルアーツのオーディションに合格。ハリウッドのマジックキャッスルに出演。2004年「奇跡の指先前田知洋（日本テレビ系列）」などの特別番組の出演を始め，近距離で見せるクロースアップ・マジックのブームを日本に巻き起こす。2005年 英国王室チャールズ皇太子もメンバーのマジック・サークル・ロンドンの100周年記念イベントのゲストで招かれる。同会の最高位のゴールド・スター・メンバーを授与されている。